

追悼

John Maddox (1925-2009)

ジョン・マドックス (1925～2009)

Walter Gratzer

Nature Vol.458(983-986)/23 April 2009

2009年4月12日に死去したジョン・マドックスは、1966～73年と1980～95年に*Nature*の編集長を務めた。それまで科学研究の評価の点でもジャーナリスティックな報道活動の点でも、仲間意識や素人くさがりが抜けなかった*Nature*は、彼が編集長に就任したことをきっかけにして、挑発的で専門的な学術誌へと大きく変貌した。

John Royden Maddox (ジョン・ロイデン・マドックス)は、科学と科学政策に多大な影響を及ぼした。近年のジャーナリストや編集者を見わたしても、彼ほどの影響力をもつ者は皆無である。科学者として大学で研究に従事した経歴をもち、生涯にわたって科学への情熱を燃やし続けたマドックスは、理解の深さと権威の点で稀有の科学ジャーナリストだった。多くの研究領域、特に理論物理学と宇宙論の分野で、彼は専門家と同じレベルで技術的な問題を論じ合うことができた。*Nature*の編集長として、彼はどのような論文も鵜呑みにすることはなく、著者や査読者と議論になると、自ら方程式を解いて論争を解決することで知られていた。

マドックスの知性は飽くことを知らなかった。あらゆる知識を吸収する能力をもち、驚くべき記憶力に恵まれていた彼は、ほとんどどんな話題についても洞察に満ちた発言をし、文章を書くことができた。それは、いとまたやすいことのようにみえた。*Nature*の編集長として2回の長い任期を務める間、彼はよく秘書のメアリー・シーハンに論説を口述筆記させていたが、後で手を加える必要があることはめったになかった。

マドックスは、1925年にウェールズ南部のスウォンジ近郊に生まれた。地元の学校に進んだ彼は、16歳で化学を学ぶためにオックスフォード大学のクライストチャーチ学寮の奨学金を得た。彼はラグビーに熱中したりしてにぎやかな大学生活を送りながら、しだいに理論物理化学への興味を深めていき、分子軌道論の第一人者であるチャールズ・クールソンとともにロンドン大学のキングズカレッジでの研究プロジェクトに乗り出した。

マドックスはけっして博士論文を書こうとしなかった。彼は1949年にクールソンのもとから理論物理学の助講師とし

てマンチェスター大学に赴いた。当時、マンチェスター大学では最高水準の自然科学研究が行われており、アラン・チューリングやF. C. ウィリアムズが最初の高度なコンピュータの開発に取り組んでいた。マドックスはしばらくの間、チューリングとともにプログラマーとして仕事をした。

数年にわたり理論物理学の研究と教育に従事したマドックスは、稀有な才能をもつ理論家とみなされていたが、講師の給料で家族を養うことの厳しさを感じていた。そのため、1955年にマンチェスター・ガーディアン紙(今日のガーディアン紙)から大学の2倍の給料で科学記者として働かないかと打診されたとき、彼はそれを拒絶することができなかった。自分の研究成果を発表することを常に躊躇していた彼が、毎日コラムを発表するという挑戦を受けて立ったのである。彼は、ひとたびテーマを指定されると短時間で非常におもしろい2000語のコラムを書きあげることができたので、当初より新聞社から重宝がられた。

1962～63年にかけて、マドックスはガーディアン紙の仕事で1年休んで米国に渡り、ニューヨークのロックフェラー医学研究所(今日のロックフェラー大学)で教鞭をとった。彼は少しだけ講義をし、科学について多くのことを語り、本人の言葉を借りるなら「くだらない論文を書いた多くの人々を説得して、その発表を阻止」した。研究所の所長であったDetlev Bronkは、マドックスを改めて終身教授として迎えたいと申し入れたが、彼はすでに新しい挑戦に打って出ようと決意していた。それは、英国に戻ってNuffield財団に参画し、野心的な科学教育計画を率いることだった。

そんな中、*Nature*からマドックスに声がかかった。1965年に編集長のジャック・プリンブルが死去したため、当時*Nature*を所有していたマクミラン社の創業者一族であり、

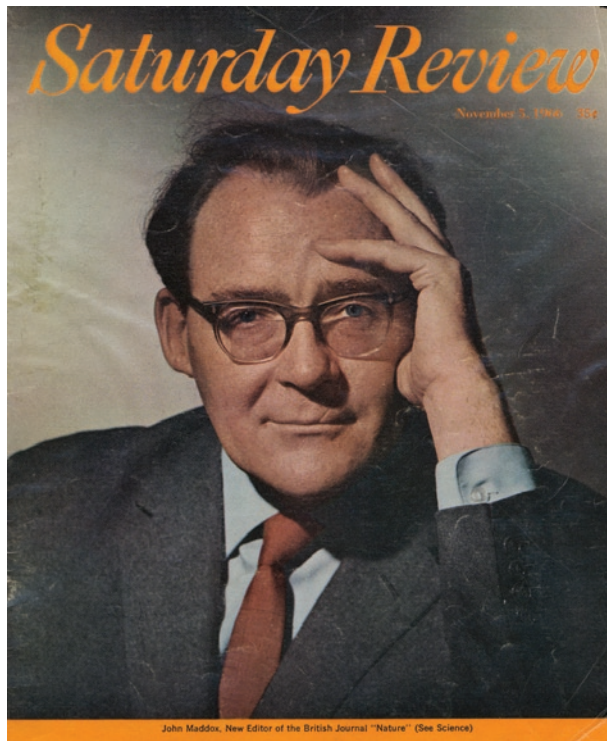
社長であったモーリス・マクミランが、マドックスに編集長への就任を打診したのである。その頃の *Nature* は嘆かわしい状態にあった。発行部数はわずか1万1000部で（そのうちの3000部は海外で販売されていた）、報道内容は貧弱で精彩を欠いており、スタッフの中に科学者は1人しかいなかった。さすがのマドックスも、瀕死の学術誌の編集長になることには躊躇した。彼はマクミランに、掲載待ちの論文はどのくらい残っているのかと尋ねた。マクミランが *Nature* 編集部の人にやって論文を数えさせると、その数は2300本もあった。自ら編集部を訪れたマドックスは、掲載待ちの論文が投稿された月ごとに床の上に積み上げられて、ガウス分布のヒストグラムを作っているのを見た。彼は、この仕事を引き受ける条件の1つとして、掲載待ちの論文をなくすために18か月間ページ数を増やすことを承諾させた。彼は毎日、論文がぎっしり詰まったスーツケースをもち帰り、帰宅後や週末の時間を使って1本残らず綿密に吟味した。

わずか数か月で、*Nature* は停滞から回復した。マドックスのペンからは科学政策に関する痛烈な論説が繰り出され、活気を取り戻した *News & Views* では科学の現状が論評され、査読のシステムが導入された。マドックスは有能なスタッフを補充し、自分のもつエネルギーと情熱を吹き込んでいった。彼はタイムズ紙の科学ニュースコラムも執筆し、1970年には米国ワシントンD.C.に *Nature* 初の海外オフィスを設立した。

1973年に出版方針をめぐって経営陣と対立したマドックスは *Nature* 編集長を辞任し、デイビッド・デイビスがその後任となった。マドックスはその頃、*Nature* の姉妹誌として *Nature New Biology* と *Nature Physical Sciences* の出版を開始しており、事実上、毎週3冊の雑誌を発行していた。この先見の明ある試みが自分の退陣により放棄されてしまったことを、彼はひどく残念がった。マドックスはフリーのライター兼編集者として2年間活動した後、Nuffield財団の理事に選任された。けれどもやがて、事業を展開する機会の少なさに苛立ち始め、1979年にマクミラン社から *Nature* の編集長への復帰を打診されると、それを受け入れた。

マドックスが不在の間も、*Nature* はますますの業績を上げていたが、その発行部数はわずかに減少していた。マドックスは理想の *Nature* 像を実現するために、新たな情熱をもって活動を再開した。彼はスタッフを増やし、フランスのル・モンド紙で科学に関する記事を連載するよう手配した。*Nature* は科学・技術の最重要分野の会議も後援し、英国ケンブリッジ、ボストン、パリ、東京などで開催された会議には多くの聴衆が詰めかけた。

米国に続いて、フランス、ドイツ、日本にも編集部が設



米国の評論誌 *Saturday Review* は、1966年にマドックスが *Nature* の編集長（1期目）に就任したことをカバーストーリーとして報じた。

置され、*Nature* は真に国際的な雑誌になった。発行部数は5万7000部まで伸び、その評価もうなぎのぼりだった。「すべての科学者（およびその他の多くの人々）にとって、*Nature* を欠かすことのできない雑誌にし、毎週の配達を待ち焦がれさせるようにしたい」というマドックスの夢はほとんど実現していた。

マドックスは停滞を毛嫌いした。彼は無数のアイデアをもっていて、その多くは文句なしにすばらしいものだったが、なかにはスタッフをうろたえさせるようなものもあった（彼はしばしば、スタッフに気を緩めさせないためだけにこうしたアイデアを強行した）。科学のおよびジャーナリスティックな成功を常に追い求める彼のやり方は、しばしば自らを苦境に追い込んだ。時に彼は周囲の猛反対を押し切って、論争の種になりそうな論文を掲載させた。そんなときには、編集部の悲鳴に近い反対も、査読者の強い意見も彼を止めることはできなかった。一度か二度、そのような論文が査読者の反対意見とともに掲載されたことがある。

こうした逸話の中で最も悪名高いのは、1988年にパリのジャック・バンヴェニストの研究室から投稿された論文をめぐる論争である。論文は、分析混合物中に分子が1つも含まれていないほど高度に希釈された物質が、なおも生物学的影響を及ぼすと主張するものだった。マドックスはこの論文

を *Nature* に掲載し、その少し後に、彼自身とアメリカ人査読者、有名なマジシャンのジェームズ・ランディによるバンヴェニスト研究室への訪問に基づく反駁記事を掲載した。ある記者は、「*Nature* が掲載する論文を選択するシステムが十分に明らかになった。編集長と奇術師とウサギが選んでいたのだ」と書いている。マドックスはその後の一連の騒動を楽しみ、悪びれるようすもなかった。

科学の進歩が続くと、新しい雑誌の創刊を求める声が高まってきた。*Nature* も、他の有名な学術誌も、掲載を求める質の高い論文のごく一部しか取り上げることができなくなっていた。そこで、*Nature* の月刊姉妹誌を創刊して、ページの不足や、専門的すぎる (*Nature* は昔も今も、幅広い層の読者が興味をもてる論文を取り上げることをめざしている) などの理由で本誌では取り上げられなかった論文を掲載することになった。1992年に最初に創刊された *Nature Genetics* は、たちまち大成功を取めた。これらの姉妹誌は *Nature* の名を冠しているが独自に編集されており、現在、15のリサーチ誌と15のレビュー誌が刊行されている。

ジョン・マドックスは、1996年に科学への貢献によりナイト爵に叙された。2000年には王立協会の名誉会員に選出された。彼がその著書や *Nature* の論説、新聞や雑誌の記事、公開講義、テレビやラジオの番組において科学と国内外の科学者の声を代弁していることは広く認知されていた。明らかに彼の発言がきっかけになって政府機関の科学政策が再検討されることもあった。マドックスは、無責任な報道をする者を敵に回すことを恐れなかった。英国のサンデイ・タイムズ紙が AIDS の原因について社会的に危険な、間違った仮説を

支持したときには、これを徹底的にやり込めた。マドックスは、*Nature* の編集長として22年の充実した年月を重ねた後、1995年に引退した。

マドックスには『What Remains to be Discovered (邦題: 未解決のサイエンス)』(Free Press 刊, 1997)をはじめとする数冊の著書があるが、これらはいずれも刺激的な内容で、広く注目を集めた。彼は根っからの旅人であり、講演の依頼や会議への参加要請があると、それがどんな場所であっても断ることはめつたになかった。彼はロシアで配布するために *Nature* の月刊ダイジェスト版を創刊し (残念ながら現在はなくなってしまった)、ウェールズにもついていた別荘に近いハイオンワイで開催される有名な文学フェスティバルに科学の要素を付け加え、良心的な評議員となった。

ジョン・マドックスとともに過ごす時間は魅力的で刺激的だった。彼の交友範囲は科学分野を越えて広がっており、*Nature* 編集部やその他の場所で彼に世話になった人々の多くは、彼が引退した後も頻りに連絡を取り合っていた。彼はわずかに口ごもり、常に礼儀を忘れなかったが、怠け者やうぬぼれ屋には手厳しく、同じ情熱をもつ人々のことは無条件に支援した。優秀なジャーナリストであり伝記作者でもある妻ブレンダとの間には、一男一女がいる。2人とも、両親に続いてジャーナリズムの世界に入り、すばらしい成功を取めている。前妻との間にも息子と娘がいる。 ■

Walter Gratzer (ウォルター・グラッツァー) は、ジョン・マドックスが最初に任用した News & Views のレギュラー編集者。ロンドン大学キングズカレッジの Randall 細胞・分子生物物理学部門に所属。